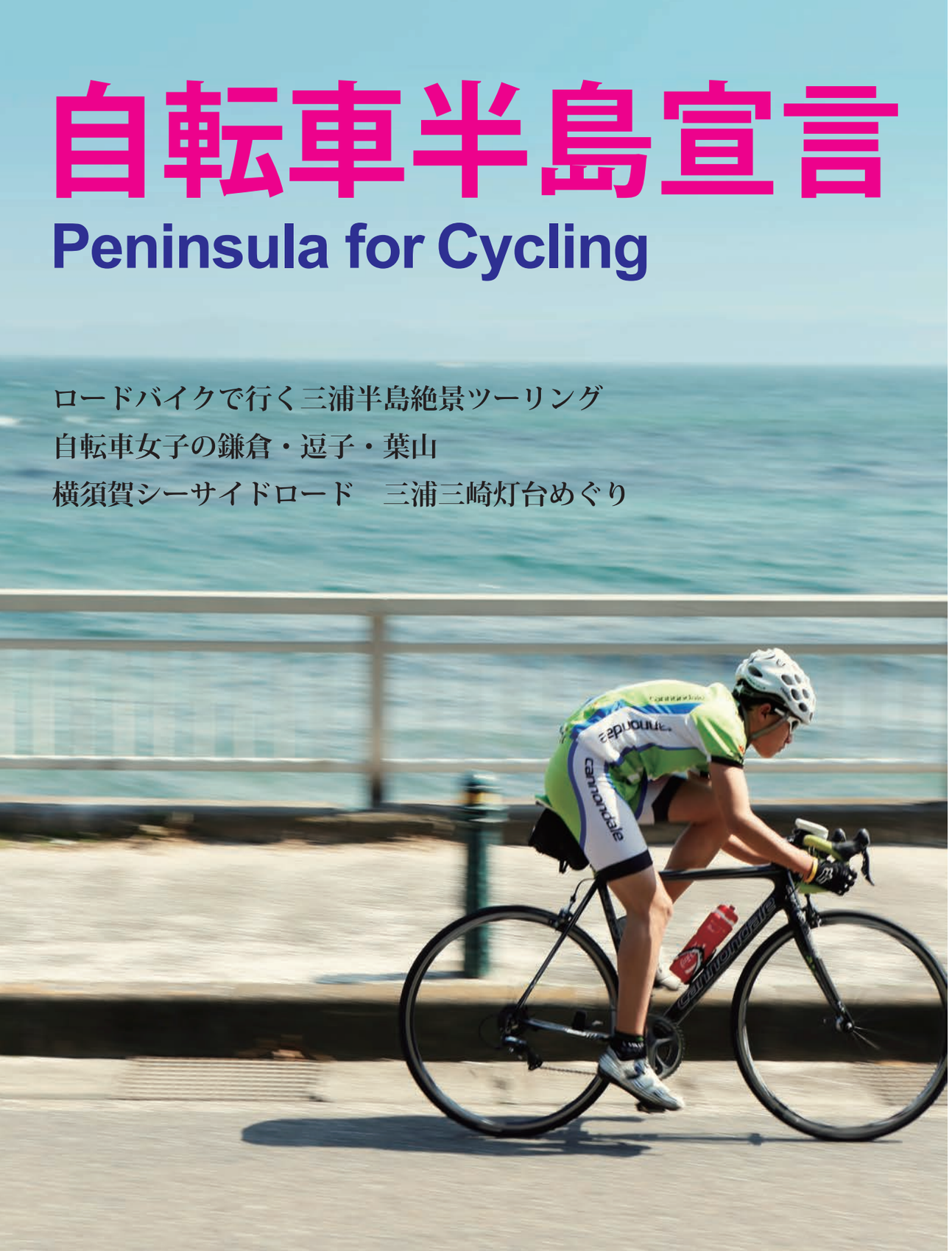
自転車半島宣言

Peninsula for Cycling

ロードバイクで行く三浦半島絶景ツーリング
自転車女子の鎌倉・逗子・葉山
横須賀シーサイドロード　三浦三崎灯台めぐり



自転車半島宣言
Peninsula for Cycling

～自転車も のれば車の なかまいり～

本紙の掲載写真は安全を確認のうえ、撮影したイメージ写真です。
実際に自転車で道路を走行する際は、交通法規を守って走行してください。

三浦半島サミット事業　2015 年 1 月 30 日（改訂版）
発行：三浦半島観光連絡協議会　編集制作：NPO 法人 横須賀創造空間

三浦半島を走る、ということ。

ペダルを漕げば、キラキラと輝く海が見えてくる。
ハンドルをさばけば、大地の恵みが育つ丘にたどり着く。
ちょっぴり潮の香りがする風を受けて進めば、鮮やかな緑色をまとった山々が迫ってくる。
青い海に囲まれ、豊かな緑が丘を彩る三浦半島は、海と山の幸が豊富で、温暖なリゾートエリアだ。
次々にあらわれる絶景、路地裏の佇まい、そして過去と現在が交錯する街並み――ここは、そのすべての景色が宝物のように凝縮されたペニンシュラ。
思い思いに自転車を走らせれば、きっと自分だけの風景が見えてくるはずだ。

時速10kmで触れる、人々のおもてなし。
時速20kmで見える、大地との一体感。
時速30kmで感じる、風になる爽快感。

さあ、さんさんと降り注ぐ太陽の光を浴びて、自転車を漕ぎ出そう。
風とともに、とっておきの宝物を探しに――。

Peninsula for Cycling
自転車半島宣言

■ロードバイクで行く絶景ツーリング

ロードで僕は、三浦半島の風になる。

Model / Kouei Ohashi
Text / Hiroaki Fujino
Photo / Takaaki Miura

少しひんやりとした朝の空気を胸いっぱいに吸い込んで、僕は慣れ親しんだロードバイクのペダルと、シューズのビンディングを合わせる。カチッ。

右足をこうして自転車に固定する瞬間、僕はいつも、この相棒が身体の一部になることを実感する。そしてそれはまぎれもなく、僕と大地が自転車を通してシンクロするということに他ならない。

身体の調子はいい。補給食もバックポケットに詰め込んだ。あとは、僕の想いをこの自転車に乗せ、大地に伝えるだけだ。その答えは、すぐに道が返してくれる。サドルの上の僕は、道と語り続けながら、全身を使って前へ進めばいい。

まばゆいくらいの朝陽に少し目を細めながら、サングラスを下ろす。僕は右足をグッと踏み込んで、緑の大地を走り出す。

そう、半島の風になるために——。

キラキラと太陽が遊ぶ凪を横目に、海沿いの道を走る。

もう見慣れた、いつもの海だけれど、その様子は乗るたびに違うことを、僕は知っている。

海に、同じ瞬間なんて二度とやって来ない。ましてや僕と自転車と、太陽と海と、そして風と。その一瞬のシンクロは、もう一生やって来ないだろう。僕だけが味わえる、そんな一体感が、たまらない。

岬を回り込むと、大好きなアップダウンがやって来る。

短くて急な坂を過ぎれば、その達成感を一気に帳消しにするかのような下り坂。アップダウンが続くハードなコースを、夢中でクリアしていく。

必死にペダルを漕いでいると景色が見えない、なんて言うけれど、ここではそんなことはない。あの坂の向こうに、その丘を下った先に——繊細な海岸線が連続する美しい海は、自動的に僕の視界に入ってくるのだから。

やがて道はフラットになり、アップダウンを繰り返しながら、海ギリギリに進んでいく。

海が見える道、というけれど、三浦半島の外周コースではそれが当たり前。いつでも、ほとんどすべての時間で、僕のすぐそばには海がある。

そしてトンネルをいくつも越えて、僕は湘南国際村へとハンドルを切る。この半島をほぼ一周した頃にやってくる坂は、登るのに一瞬躊躇してしまうけれど、僕を強くしてくれる場所であることは間違いない。

もう一度深呼吸をして、登り始める。心拍計を注意深く見てギアを細かく動かしながら、僕はゆっくりと、しかしどん欲にこの急坂を仕留めて行く。そう、ヒルクライムはハンティング。自分がもつすべての筋肉と語りながら、身体と自転車をシンクロさせ、ぐいぐいとペダルを踏み込んでいく。

苦しいけれど、最後はやっぱり、キモチ。それを全身に伝えながらダンシングした先にあるのは、僕だけの時間、僕だけの景色。

ついさっき登ってきた坂を、一気に駆け下りる。汗ばんだ全身を、山あいの冷えた空気が包み込む。

長くひんやりとしたトンネルを駆け抜けると、急に視界が明るくなって、キラキラと輝く夕暮れの海が見えた。このまま突っ切って、海の上をどこまでも走って行きたくなる景色。この瞬間が、とても好きだ。いつ見ても、西陽に染まる凪の美しさは、一日走った疲れを瞬く間にほぐしてくれるようだ。

西に向いた岬の駐車場に佇んで、はるか向こうにシルエットで浮かぶ富士山を眺める。そこから僕に伸びているのは、オレンジ色の太陽のじゅうたん、そしてどこまでも続く海原だ。

そう、道はどこまでも続いている。

三浦半島で、僕はいつもペダルを回し続け、時に自分を追い込み、時に絶景に癒されながら、海へと吹き進む風を感じる。

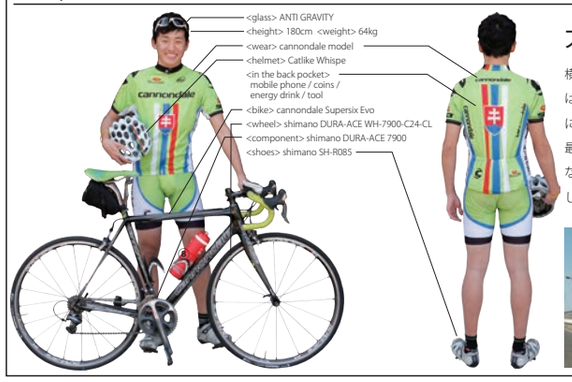
平均時速30キロで巡航する、ペニンシュラ・ロード。

そこにあるのは、この半島を渡る〝風〟になる時間だ。

ただ、それだけのことが、僕は好きなのかもしれない。

※本文はイメージです。

■ Cyclist Profile



大橋皐慧君 Kouei Ohashi

横須賀市在住の 15 歳。自転車を始めたのは、中学 2 年の時。「中学生の間は自転車に乗っているだけで楽しかったのですが、最近は色々なレースにも挑戦してみたくなってきました」。この春から高校に入学し、通学はもちろん自転車。学校がある日は 50 ～ 70km、休日は 100 ～ 200km を走り込む。目下の目標は、学校に自転車競技部をつくって、高体連の試合に出場すること。「普段から三浦半島をよく走っているので、この冊子をご覧になった方々と一緒に走れればうれしいです」